

近世トルコの口承文芸にみる
都市のイメージとエスニシティの多様性
～メッダー噺とそこに表現されたイスタンブルとエスニック集団～

**Ethnic Diversity and Images
of the City in Early Modern Turkish Oral Literature
Representations of Istanbul and Ethnic Groups by *Meddah* (Traditional Storytellers)**

井藤 聖子¹・山中 速人²

Kiyoko Ito and Hayato Yamanaka

Meddahlık is a traditional form of storytelling that developed during the Ottoman Empire and that resembles Japanese forms of comic storytelling such as *rakugo* and *mandan*.

In present-day Turkey, there are no surviving *Meddah* to continue the tradition, and only shorthand notations or word-for-word transcriptions of the tales remain. These documents are of great value as historical records because they contain vivid descriptions of the daily lives and emotions of people living in early modern Istanbul. Three tales that depict images of Istanbul and its ethnic cultures have been selected for analysis here. After introducing their plots, the authors attempt a close reading of these three tales in order to identify characteristics of representations of Istanbul and its religious and ethnic cultures.

Through this analysis, the following conclusions can be drawn. Even during the 19th century when the Ottoman Empire was in decline, images of the city as "prosperous and splendid" were maintained. At the same time, while values grounded in the Muslim faith formed the core of urban society in Istanbul as depicted in these tales, we can also recognize that this was richly diverse society in which people of different cultural backgrounds were actively engaged.

キーワード：イスタンブル、都市イメージ、民族的多様性、メッダー、口頭伝承文芸

Key Words : Istanbul, City Images, Ethnic Diversity, Meddah, Oral Literature

A. 論文の目的と射程

この論文の目的は、科学研究助成金を受け研究を続けてきた「可視化する地域社会の宗教／エスニック文化の比較映像分析」の研究過程で得られた文献資料の中で、同研究の研究目標とはやや射程を異にするものの、その研究成果を近接領域か

ら補うという意味できわめて重要性の高い史料をとくに選び、その紹介と分析を行うことにある。

2012年以来3年間継続されてきた同研究においては、おもにトルコ共和国最大の都市であるイスタンブルにおける街頭景観を観察の対象として選び、その宗教的／エスニック文化的表象の変容を考現学的な手法を援用しながら記述し、分析を行

1 シェイマ・ギュンギョル研究所研究調整員（文学博士）

2 関西学院大学総合政策学部メディア情報学科教授（社会学博士）

なってきた。その過程で明らかにされたことは、すでに論文として報告³しているように、現在、イスタンブルで生じている都市風俗上の変化は、表象のレベルにおいて、人々(とりわけ女性)のイスラムへの指向が拡大傾向を示すものとして読み取ることができた。しかし、さらに丁寧にインタビュー調査⁴を重ねることによって、そのような表象レベルの変化から現地の人々がどのような意味を汲み出しているのかを明らかにしていくと、イスラムへの単線的な傾倒ではなく、むしろ、イスタンブルという都市のもつ宗教／エスニック文化の多様性と、人々がそれを解釈する際の多義性こそが共通して炙りだされてくるものとなった。

研究では、そのようなイスタンブルの文化的多様性や多義性を現実に即して記述すること、そして、それを大阪・生野での調査結果と比較検討することにもっぱら精力を費やしたのだが、それらとは別に、このようなイスタンブルのもつ宗教／エスニック文化の多様性あるいは多義性が、どこに由来するのかという問題について深く関心を抱くところとなった。

そのような関心を抱いていたところ、研究作業の一環として行なったイスタンブルに関する都市風俗資料の収集過程で、きわめて興味深い史料を手になることになった。その史料とは、メッダー嘶⁵と呼ばれる口頭伝承文芸にまつわる口述の記録である。オスマン帝国時代に発展を遂げたメッダー嘶は、寄席芸としての日本の落語や講談のような形態をもつ口承文芸の一種である。ただ、現在、すでにその話芸を継承する者はなく、速記や

逐語録の形で記録が残っているのみである。しかし、それらの記録は、近世のイスタンブルの都市風俗や市民生活を活写する史料として、高い価値をもつものと思われた。

本研究の共同研究者である井藤聖子は、このメッダー嘶を口頭伝承文芸の視点から研究をつづけてきており、実際に数多くのメッダー嘶の収集を行い、日本語への翻訳を進めている。そこで、本論文では、これらのメッダー嘶の中から、イスタンブルの都市風俗や文化的多様性に関連した嘶を選び、それらを紹介するとともに、それらの嘶から導き出すことのできるイスタンブルの宗教／エスニック文化にかかる特徴を描き出すことを試みた。

また、近世トルコのメッダー嘶が日本語に訳出され紹介される事例は、著者の知る限りこれまでなく⁶、本論文がその最初の試みになると信じるものである。よってその学術的意義を考慮し、部分訳ではなく、嘶の内容が理解できるよう可能な限り一嘶全体を訳出するよう努めた。

本論文の執筆にあたっては、メッダー嘶の選定と翻訳／文体変換の作業を井藤が担当し、また、その文化的特徴の記述を山中が担当した。⁷

B. メッダー嘶の概要と特徴⁸

1. メッダーとメッダーフルック

メッダーとは、単独で聴衆／観客の前で物語を演じる語り手のことを意味する。

辞書⁹ではメッダー (meddah) の意味として「賛

3 山中速人、井藤聖子「都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ～イスタンブル(トルコ)における街頭映像の記録と分析」『総合政策研究』no.43, 2013年3月, pp.83-105.

4 井藤聖子、山中速人「イスタンブル・ファーティヘ地区(トルコ)の街頭景観における宗教的表象とその多義的解釈～景観映像に対する読み取りインタビュー調査報告」『総合政策研究』no.45, 2013年11月, pp.39-83.

5 原語は、meddah hikâyeri(メッダー・ヒキヤエリ)。一部に「漫談」と訳された事例もあるが、本論文では、「メッダー嘶」と訳する。

6 NII学術情報ナビゲータ(CiNii)のデータベース検索を使用し、検索キーワードを「メッダー」あるいは「meddah」に設定して、それぞれ検索を行なった結果、ヒットされた文献数はともに皆無だった。

7 本論中、井藤はB章およびC章の執筆を分担し、また、山中はA章およびD章の執筆を分担した。

8 この章の内容は、拙論Türk Meddah Hikayeleri ile Japon Rakugo(Nükteli Hikaye)larının Mukayesesi, 博士論文(提出：イスタンブル大学、2012年)に基づき、要約、訳出した。

9 使用した辞書は次の2つである。Devellioglu, Ferit: *Osmanlıca-Türkçe Ansiklopedik Lugat*, 26. bs., Aydı Kitabevi, Ankara, 2010. および *Türkçe Sözlük*, 10.bs., Ankara, Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu, Türk Tarih Kurumu Yayınları, 2005.

美する人、誉め称える人」が当てられている。また、「宮殿や屋敷や珈琲サロンなどの広間で、多様な階級の人たちに話やウイットを語る芸人」を指す。芸人としてのメッダーが、聴衆／観衆の前で、物まねをしながら、物語や笑い話、小話などを語る職業のことをメッダーフルック¹⁰という。

イスラム教が入ってまもなくの頃から、予言者ムハンマドを始め宗教的偉人を言葉で誉め称えたり、彼らを賞賛する聖人伝説を語る人に「メッダー」と言った。アナトリアでは、14世紀から人々が集う会合などで、特に英雄物語や聖人伝説を朗読したり、語ったりする人を「メッダー」と呼んだ。メッダーの類義語として「クッサハン」¹¹や「シェフナーメハン」¹²などの語も使われたが、17世紀頃から「メッダー」という呼び名が広く使用されるようになった。以来、メッダーは文学や舞台芸術の世界で一つの確立された術語として使われている。そして、このメッダーが語る話が、本論で取り上げられる「メッダー噺」である。

2. メッダーの歴史

a. メッダーの起源

メッダーの起源としては、次のようなことが分かっている。

まず、トルコ民族において、物語を口述で語るという行為の原型は、イスラム教が入ってくる以

前のシャーマニズムが支配する社会では、シャーマンの言葉を伝える行為として存在していたといわれる。その後、コプズ¹³の旋律とともに韻文を語るデスタンジ¹⁴やオザン¹⁵などの詩人による吟詠が行われるようになった。つぎに、仏教が支配的な宗教となった、いわゆる「ウイグル国家時代」¹⁶に入ると、散文形式で宗教物語を語る様式が、一つの口承文芸として、大きく発展を遂げることとなった。中央アジアに展開していたトルコ民族がイスラム教を受け入れ、現在のトルコ共和国の領域と重なるアナトリア地方に移住すると、アラビアやイランの文化的影響を受けることになった。このアラビアやイランの文化的影響下で、クッサハンやメッダーと呼ばれている芸人たちが、宗教物語や聖人伝説、カリナとディムナ¹⁷、シェフナーメ、千夜一夜物語などの作品の一部分を読んだり、語ったりするようになった。

b. メッダー噺の誕生とメッダーの発展

16世紀末になると、特にイスタンブル、エディルネ、ブルサなどの大都市では、宗教物語を語る際に、現実社会や実生活にかかわる事柄も、一つの話題として物語の中に組み込まれて語られようになった。17世紀に活躍したメッダーのトゥフリー¹⁸は、ムラット4世に仕えた詩人で音楽家でもあったが、この人物の存在が、メッダーフルック

10 原語は、meddahlık(メッダーフルック)。

11 İbrahim Altunel, 'Kissahan', *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, vol.25, p.502によれば、「かつてのトルコ民族の国民的聖人伝説や英雄物語をサズ(saz: 琵琶に似たトルコの伝統的な弦楽器)の伴奏のもとで、韻文の形で語る詩人をオザン(ozan)と呼んだ。特にアナトリアに移住した後、イスラム教の影響と共にその地位をメッダーに委ねた。予言者ムハンマドを始め、宗教的偉人を賛美し、イスラム教について語ったメッダーは、時代と共に宗教以外の話題についても、寓話(kissa)を語るようになったことからkissahan(クッサハン)と呼ばれるようになった。シェフナーメ(şehname:皇帝の人格や成功を誉め称える韻文形式で書かれた話。王の書)の話を書く者には、シェフナーメハンと呼ばれるようになった。」

12 フェルドウシ(イランの詩人。1020年没)のシェフナーメの部分部分を語る詩人にイランでは「シェフナーメハン」と言う。アラビア文学やトルコ文学にシェフナーメを翻訳して書かれるようになる。アナトリアでは、シェフナーメの部分部分を語る／読む一人話芸をする職業芸人を「シェフナーメハン」と呼んだ。

13 Kopuz. 吟遊詩人が使う弦楽器。トルコのサズ。

14 Destancı. 吟遊詩人。

15 Ozan. 吟遊詩人。

16 トルコ共和国で認知されている標準的なトルコ史においては、トルコ民族の起源を中央アジア高原地帯に求め、そこでトルコ系民族の各部落が自立し、その中から744年にいわゆる「ウイグル国家」が成立したとされる。

17 アラビア語文学の物語。寓話集。

18 原語で、Tuflî(トゥフリー)。この詩人については、Güngör, Şeyma: *İstanbul Meddah Hikayeleri 1, Tuflî Hikayesi*, Çantay Yayınevi, İstanbul, 2006を参考にした。

の発展に大きな足跡を残した。トゥフリーが作ったと言われる数々のメッダー嘶は、当時のイスタンブール市民たちの日常生活を活写するものであった。さらに、18世紀に入ると、イスタンブールを中心に豊かな都市生活を背景として娯楽や余興などの発達がより顕著にみられるようになり、メッダーやメッダー嘶は、さらに隆盛を極めるものとなった。

c. メッダー嘶の変容とメッダーの衰退

メッダー嘶が広く受け入れられるようになるにつれ、嘶の短編化が進んだ。これら短編化されたメッダー嘶は、話芸としての「物真似」に重点を置かれるように変化していった。

19世紀に入り、トルコにヨーロッパからの演劇が入ってくるようになると、メッダーに対する興味は、次第に失われていった。そのため、メッダー嘶は、さらに短編化の傾向と「物真似」への変容を強く示すようになっていった。そして、20世紀後半に入ると、職業としてのメッダーフルックは消滅し、ラマザン¹⁹や特別な集まりに際しては、メッダーフルックに替わって舞台俳優たちがメッダーを演じるようになっていった。今日、メッダーは、このような形態でほんのごくわずかに演じられる程度にまで衰退した。現存するメッダー嘶の大半は、もっぱらそれが演じられていた頃に聞き書きされた速記録や逐語録の形で残されたものである。

3. メッダーのための空間と装置～舞台装置、衣装、小道具～

a. 演じられた場所

話芸者としてのメッダーたちが演じる空間は、彼らが暮らした時代や場所、彼らに与えられた役割などに応じて多様な形態を示した。あるメッダーは、もっぱら宮殿のみを活動の場とし、また

あるメッダーは、宮殿、屋敷、家屋、遊歩道など場所を選ばず、おもに「物真似」の芸を披露した。職業としてのメッダーフルックが成立するようになったのは、16世紀頃からイスタンブールのような大都市で広く普及するようになった珈琲サロン²⁰をその主要な活動の場とすることができたからである。日常的に珈琲サロンを利用する多くの人々を聴衆として安定的に確保することで、メッダーフルックは専門的職業として成立する基盤を確保し、その数を増やすことができた。メッダーたちは、これらの場所で、毎週定例の催事として、ヘルヴァ・ソフベティ²¹の余興として、また、ラマザンやイスラム教の祝祭日などに中産階級の家庭に招かれてメッダー嘶を語った。また夏には遊歩道で演じることもあった。メッダー嘶が珈琲サロンで演じられるようになると、「メッダー珈琲サロン」と呼ばれる専門の珈琲サロンで演じるメッダーも登場した。この「メッダー珈琲サロン」は、イスタ



図版1：珈琲サロンで嘶を演じるメッダー
出典：Turkish Government information brochure (1950s)

19 原語で、Ramazan(ラマザン)。イスラム教の断食月。

20 原語は、kahvehane(カフヴェハネ)。

21 原語で、helva sohbeti(ヘルヴァ・ソフベティ)。ヘルヴァというお菓子を食べ、詩を作ったり、おしゃべりしたりする知識人男性の会合。

ンブル、エディルネやブルサなどの大都市で大いに流行した。しかし、20世紀に入るとその人気は衰えを示し、20世紀末には庶民娯楽の世界からほぼ消えてしまい、専門的職業としてのメッダーフルックは消滅し、舞台俳優がそれに替わった。

b. 舞台装置

メッダーたちは特別な舞台装置を使用しない。珈琲サロンで演じる時は、多くの場合、聴衆／観客が観やすいような高い場所に座り、小道具のための小さな机を前に置く程度である。しかし、専門的「メッダー珈琲サロン」や一部の珈琲サロンでは、メッダーが演じる特別なスペースを設けているところもあった。演じる前後に音楽が奏でられることもあった。

c. 衣装と小道具

メッダーのための特別な衣装はなく、メッダーたちは、時に応じて、自ら好みの衣装で語った。メッダーが使う小道具にも決まったものではなく、当初は、概ね先の曲がった棒や手ぬぐいを持ちながら演じたといわれている。その後の時代では、杖やタオルも使用された。

棒や杖が、開始の合図として床をたたくために使用された。また、手ぬぐいやタオルは、スカーフや前掛けを真似る際に使われた。他にも、パイプや竿が荷物を運ぶ真似をする際に使われた。

4. メッダー噺の演じられ方

メッダー噺は、日本の落語のように、3部構成で、最初に導入部があり、次に本題に入り、最後に締めの部分で終わる。本題の途中で民謡が歌われることもあった。また、音楽家たちが傍にお

り、メッダーたちの「出」や「入り」の時、また噺の途中で、効果音を演奏することもあった。

メッダーたちは、聴衆／観客の要求や都合に応じて、自由に噺を長くしたり、短くしたり、内容を変えたりすることもあった。また、メッダーたちは、もっぱら聴衆／観客を楽しませるために噺をしたが、時には説教や教訓話をすることもあった。

それでは、本論の目的に沿うメッダー噺の事例を3つ選び、以下、その内容を紹介したい。なお、オリジナルなメッダー噺の聞き取り記録(あるいは速記録)では、その大半の部分は、日本の落語のように、登場人物たちの会話の掛け合いによって構成されている。しかし、本論の目的を考慮し、噺の筋を中心に紹介するため、「読み物」への文体変換を行なった。文芸作品として、オリジナルに忠実に翻訳されたメッダー噺の紹介は、機会を改めて行うことにしたい。

C. メッダー噺～3つの事例～

1. 『見たか？このブチュックを』²²～アナトリアから出てきた世間知らずな若者の善意と知恵が主人夫婦の結婚の危機を救う話～

イスタンブルからはるか離れたダダイ²³のエーリキョベック村から出てきた、無邪気で気だてのいいブチュック²⁴という名前の少年がいた。この少年は「イスタンブルは、石も土も金でできている」という諺を信じて、厚手の布袋とツルハシを持ってイスタンブルにやってきた。そしてガラタ橋²⁵の真ん中でツルハシを振るい始めた。通りかかったヒュダイ²⁶という名前の紳士がそれを見て、「どうして橋を削っているのか」と聞いた。すると、少年は先程の諺を繰り返した。「イスタン

22 原題は、Gördün mü Şu Buçuğu? (『見たか？このブチュックを』) このオリジナルの出典は、Oral Ünver: 'Yeni Bir Meddah Hikayesi: Gördün mü Şu Buçuğu', Tercüman(Gazetesi), 14 Eylül 1976, Meddah Kitabı, Kitapevi Yayın, İstanbul, 2003, p.174-177.

23 原語でDaday。現在のトルコ共和国の黒海にあるカスタモヌ県にある地域。

24 原語ではBuçuk.

25 金角湾にかかる可動橋で、旧市街と新市街を結んでいる。1845年に建設された。

26 原語ではHüdaî.

ブルで働けば稼ぎがよい」という諺の意味を、「イスタンブルの石も土も金だ」と言葉通りに信じた少年の無邪気さが気に入ったその紳士は、少年を下働きとして雇った。こうしてブチュックは、ヒュダイのところで働き始めた。

毎週木曜日の夜、ブチュックは主人ヒュダイのお供をして街に出ることになっていた。しかし、いつも決まった家の前にくると先に帰るように言われ、同時に、ヘルヴァ・ソフベティ²⁷に行くと妻に伝えるように命じられた。このような日々が続いた。

ある日、主人ヒュダイの妻が泣いているので、それを見たブチュックは、どうして泣いているのか尋ねた。妻は、実は、夫がヘルヴァ・ソフベティではなく、スルメリ・ベルキシ²⁸という情婦の家に通っているのを知っているのだと答えた。それを聞いて妻に同情したブチュックは、自分にお金を預けるよう求めた。妻が何に使うのかと問うと、ブチュックは、自分に任せてくれたら、主人はおとなしく戻り、その後は女の名前すら口にしなくなり、そして、主人は元の鞆に収まることを約束した。妻がブチュックに金を渡すと、ブチュックは、さっそくその金で、先端に小さな鈴のついた棍棒を細工師に作らせた。この棍棒で叩くとシャンシャンと音がした。

さて、主人のヒュダイが情婦であるスルメリの家にいった夜、ブチュックはこっそりとその家に忍び込んだ。そして二人が深く眠っているのを見定め、持参した棍棒で二人を殴りつけた。棍棒を振り下ろすたびに辺りにはシャンシャンと鈴の音が鳴り響いた。暗闇で不審者に突然殴られたスルメリはあまりのおそろしさに気絶してしまい、

ヒュダイは動転して這々の体でそこから逃げ出した。こうして夫は家に戻り、妻はおおいに喜んだ。

さて、歳月が経ち、ブチュックは主人ヒュダイの右腕となり、ヒュダイの仲介でディルベルという女との結婚も果たした。そんなある日、主人のヒュダイとブチュックの乗っていた馬車が、昔ヘルヴァ・ソフベティに行くと言ってブチュックを帰した例の家の前に差し掛かった。主人のヒュダイは、過去を懐かしく思い出して「昔、ここに通いしを～」と、過去の秘密を詩にして歌い始めた。傍にいたブチュックも、それに応えて節をつけた詩で返した。

「ご覧になられたか？ このブチュックを／殴られたか？ この小さき鈴の付きし棍棒で／今、その逃げ出したる家の前を通り過ぎぬ」と、あの夜、自分がしたことを告白した。

「あの夜のことは、お前がやったのか」と驚いて問いただした主人に、ブチュックは「ご主人様は家庭を忘れ、あばずれ女の虜になりました。私は、奥さまの涙に耐えられませんでした」と答えた。

すると、主人のヒュダイは怒るどころか「よくぞやってくれた」と、自分の結婚生活を守ったブチュックを褒め、その額に感謝の接吻をしたのだった。

2. 『美男の布屋』²⁹～豪商の若い息子が、恋した女に会いたい一心で、嘘をついて父親に金を出させ遣い込んでしまう話～

アスマールト³⁰の商人の中でも有名な豪商アンベリ³¹に、スレイマン³²という息子がいた。スレ

27 helva sohbeti. ヘルヴァというお菓子を食べ、詩を作ったり、おしゃべりしたりする知識人男性の会合。

28 原語ではSürmeli Belkis.

29 原題は、Kumaşçı Güzeli(『美男の布屋』)。オリジナルの出典は、Ünver Oral, 'Kumaşçı Güzeli', Spn Havadis(Gazetesi), 11 Ekim 1972, Meddah Kitabı, Kitapevi Yayını, İstanbul,2003, p.156-164

30 原語は、Asmaaltı(アスマールト)。イスタンブル市ファーティフ地区にある通りの名前。

31 原文ではAnberi(アンベリ)の語尾にefendi(エフェンディ)という尊称が付されている。この尊称の用法は広く、「様」「公」「紳士」「主人」などの意味をもつ。原文では、この敬称はHüdaiにも、一部Süleymanにも付けられている。

32 原語は、Süleyman(スレイマン)。

イマンが成長するのを見て、両親は、息子を父親の後継者として立派な商人にしようと考えた。そこで父親は、スレイマンを知り合いの商人ヒュダイ³³の元に修行に出した。

ヒュダイは、スレイマンに、布の束を渡し、商いの仕方やしきたりを教え、行商に出るよう命じた。スレイマンは、丹精な顔立ちと立派な体格を持っていたので、客の女たちは争ってスレイマンから布を買った。次第に、スレイマンは「美男の布屋」として評判になっていった。しかし、スレイマンは、そんな女たちの秋波にはまったく応えようとしなかった。

ところが、彼の前にギリシャ系の美女エレニが現れたとき、スレイマンは、ついに恋に落ちた。スレイマンは、エレニの両親がすでにこの世になく、彼女が祖母に育てられたことを突きとめた。このエレニの祖母は強欲で、スレイマンがエレニに半時間でも会いたいと頼むと、金貨20枚を払えば、許すと話した。

恋におぼれたスレイマンの様子がおかしいことを心配した両親は、息子に問いただした。スレイマンは、とても父親には恥ずかしくて言えないと尻込みするばかりで、父親はますます心配の度を高めていった。父親がさらに息子を問いただすと、スレイマンは、実は競売で船を金貨20枚で落札したと嘘をついた。

スレイマンは、父親にこう言った。

二日前、行商でクンカプ³⁴辺りを歩いていたら海岸に出た。人だかりがするので、なんだろうと近づいてみると「金貨5枚、金貨7枚、金貨10枚」などと声が聞こえてきた。人混みの中から白髪髭のアルメニア人の漁師が「おまえも何か言ったらどうだ?」と声を掛けてきた。すると、ユダヤ人の古物商が「そんな甘言に乗るな。大損するぞ」と別の方から口を挟んだ。ところが、その古物商も自ら大声で「金貨18枚」と叫んだ。これに間髪いれ

ず、漁師が「金貨19枚」と応じた。その勢いにつられ自分も思わず「金貨20枚!」と叫んでしまった。すると、まわりの声はそこでぴたりと止まり、前方の男が、手に持った木槌を厳かに打ち鳴らしてこう言った。「金貨20枚で落札。これでこの船は貴方様のもの。」その声ですべてがわかった。自分は船を競り落としてしまったことに気づいたのだ。無知な自分が恥ずかしく、また、支払う金もなく途方にくれていると、一人の老人が「この男は、ヒュダイの見習いで、父親も名のある商人だ。必ず金を作るだろうからそれまで待ってやれ」と助け舟を出してくれた。

スレイマンは、ユダヤ人やアルメニア人の口ぶりをたくみに真似ながら父親にこう説明した。それを聞いた父親は、息子の説明を信じ、すぐに代金を払うため、スレイマンに金貨を渡した。しかし、その金を手にするやいなや、スレイマンはエレニの家に行った。そこには、スレイマンとすでに相思相愛になっていたエレニが待っていた。しかし、愛し合う二人には、半時間の逢瀬などあつという間に過ぎなかった。スレイマンは、エレニの祖母に、もう少し長く娘と一緒にいたい、手も握りたいと頼み込んだ。これに対し、祖母は、スレイマンがさらに20枚の金貨を支払うことで手を打った。

息子の様子がおかしいことに気づいた父親は、息子に悩みを打ち明けるよう強く論じた。すると、スレイマンは、落札した船は修理が必要のだと嘘を重ね、父親から修理代としてさらに20枚の金貨をせしめた。その金貨で、今度は2時間だけ二人は会うことができた。しかし、エレニの祖母がぴたりと傍に付き添っていたため、二人の間はそれから先には進まなかった。

こうして月日が経った。しかし、祖母が傍にいたので二人の距離はいつまでたっても一向に縮まらず、恋人たちの恋慕は増すばかりだった。

33 原語は、Hüdai(ヒュダイ)。

34 原語は、Kumkapı(クンカプ)。

ついに我慢も限界に達したスレイマンは、50枚の金貨と引き替えに、祖母の同伴なしでエレニと一晩だけ一緒に過ごさせてほしいと懇願した。祖母はそれだけは絶対に許されないと応じなかった。というのも、二人は宗教が違うので結婚できなかったからだ。そこで、スレイマンは、そのことは承知の上で、いつか別の男の妻となるエレニに手を出すことは絶対にしないと約束した。熱心に懇願するスレイマンにさすがの祖母も折れ、部屋の扉を閉めず、そこからときどき覗いてもよいという条件を受け入れるなら、一晩だけ彼女の傍で過ごしてもよいと応えた。こうして、スレイマンは、夢かなってエレニと一晩を過ごす機会を手にした。

さて、その金貨50枚を作るため、スレイマンは父親に、船の修理がまだ終わらないとさらに嘘を重ねた。船を出すには、ほかにもマストや帆や縄も必要で、もっとたくさんの金がかかるのだと、さも辛そうに説明し、父親から金貨50枚をださせるのに成功した。

しかし、息子の度重なる金の無心を不信に感じた父親は、今度は息子の跡をつけ、ついにことの全容を理解するに至った。

次の日、朝帰りした息子に父親は「スレイマン、お前の船の様子はどうか？ 海に出せそうか？」と尋ねた。息子は「いいえ、まだです」と答えた。この息子の答えを聞くと、父親はきっぱりとこう言った。

「いいか、聞け、息子よ。お前の借金を払い続けることには我慢が尽きた。これ以上金を出せという話は無視せよ。もう十分だ。早く船の始末をつけてしまえ。要は、そいつに乗ってしまえばいいのだよ。」

いのだよ。」

その言葉の意味するところをすばやく察したスレイマンは、父親の腕をとり、感謝の接吻をした。

3. 『理髪師メメッドの話』³⁵～金持ちの老人と結婚した若い妻が同じ年頃の若い男と恋に落ちる話～

エディルネカブ³⁶のチュキュル・ボスタン界隈に貴金属商を営んでいるハサンという名の年若い男がいた。ハサン氏は裕福で教養もあった。ハサン氏は、インド、バロチスタン³⁷、ダゲスタン³⁸、ギリシャなどの地域を相手に手広く商いを営んでいた。彼は年の頃60歳くらいで、これまで何度か結婚の経験があった。しかし、子宝に恵まれなかったためそれらの妻とは円満に別れ、ついに孫ほど年の若い娘と結婚をした。そして、若い妻とその母親、さらに料理人と下女を自宅内に住ませ暮らしていた。

ハサン氏は若い妻にたいそう満足していた。一方若妻は年の離れた夫ではなく、本心は同じ年頃の若い男に興味があった。ところが、夫のハサン氏はたいへんなヤキモチ焼きで、家に雄鳥がいるのも気に食わないほどだった。

ある日、若妻は夫のハサン氏に、年の離れた自分のような若い娘と一緒にになったことに満足しているのかと尋ねた。夫は、もちろん満足していると答えた。これに若妻は、本心を隠し、自分も同じように満足していると返した。そして、若妻は夫のハサン氏に、自分が幼かったころ、木曜にご馳走を作り、金曜³⁹にはそれを持ってキャートハネ⁴⁰に物見遊山によく出かけたものだと話し、今の屋敷には料理人もいるから、同じように木曜に

35 原題は、Berber Mehmed Hikâyesi(『理髪師メメッドの話』)。オリジナルの出典は、Selim Nüzhet Gerçek, 'Meddah, Berber Mehmed Hikâyesi', 26 İlkteşrin 1339; 29 İlkteşrin 1339; 30 İlkteşrin 1339; 31 İlkteşrin 1339; 1 İkincişehirin 1339; 2 İkincişehirin 1339; 3 İkincişehirin 1339; 4 İkincişehirin 1339; 5 İkincişehirin 1339.Yeni Sabah.

36 原語は、Edirnekabı(エディルネカブ)。イスタンブール市内で、現在は旧市街に入るファーティフ地区内の街区。

37 原語は、Bülucistan(ビュルジスタン)。現在のパキスタンの一部。

38 原語は、Dağıstan(ダーウスタン)。現在、ロシア連邦を構成するダゲスタン共和国に含まれる地域を指す。

39 金曜日は、イスラム教の休日にあたる。

40 原語は、Kağıthane(キャートハネ)。金角湾の北に位置する町で、現在のイスタンブール市にあるKağıthane(キャートハネ)地区に当たる。

ご馳走をつくらせ、それを持って金曜に母親と一緒にキャートハネに物見遊山に行ってもよいかと夫に尋ねた。

夫のハサン氏は、二つ返事でそれを許し、自分は家を空けておけないので一緒に行かないが、母親と料理人を連れて楽しんでくるように言った。

さて木曜日、妻は、料理人に多種多様なトルコの伝統料理⁴¹を作るように命じた。料理人のメメッド⁴²は、ハサン氏の家に來てからすでに5年経っていたが、その間、不憫にもわずか5時間も外出を許されたことがなかった。そんなメメッドは、外出できると知ると大喜びで、腕によりを掛けて数々の料理を作った。とくに得意のイルミックヘルヴァス⁴³を手によりをかけて作った。メメッドは、次の日がくるのを楽しみにして待った。

さて、次の日、料理人のメメッドは、ナイフ、フォーク、スプーン、鍋、塩、パブリカの粉、パンや礼拝用の布など必要なものはすべて用意し、さらによそゆきの服に身を包んで家をでた。

一行は、エイップスルタン⁴⁴やキャートハネ行きの船着き場にたどり着いた。船着場では、多くの船頭たちがそれぞれ自分の船に客を引いていた。そこで、若妻の母親は、料理人のメメッドを船頭たちのもとに行かせ、いくらで自分たち一行をエイップスルタンに連れて行き、さらにそこからキャートハネに行き、夕方連れて帰るか、掛け合ってくるように命じた。

料理人のメメッドが船頭たちに尋ねると、船頭たちは、それぞれのお国訛りで、自分の船が一番だと競いあい、値切ろうとするメメッドと言い争いが始まった。最後は、若妻の母親が折り合いをつけ、乗る船が決まった。

一行が乗った船は出発した。金曜日なので、金角湾の海上は行き交う船々でひしめいていた。どの船にも、それぞれ出身地の違う名士たちが乗りこんでいて、呑めや歌えの大騒ぎとなっていた。ベイオール⁴⁵のトゥルンバ屋⁴⁶、バルックバザール⁴⁷の商人、カイセリ⁴⁸出身の乾物や食料品などを売る店のあるじ、アルバニア⁴⁹人の庭師、ラズ人⁵⁰の布団屋やブリキ職人、それぞれの船からは、そんな各地のお国訛りの掛け声が響きわたっていた。

それら大勢の船の中、一人乗りの小舟に年の頃は23、4のメメッドという名前の若い理髪師が乗り込んでいた。この理髪師メメッドの小舟に、ハサン氏の若妻が乗っている小舟が、偶然、接近した。ハサン氏の若妻はたいそう美人であったが、それに負けず劣らず若い理髪師のメメッドも美男だった。そして、二人は出会ったとたん、互いに一目惚れし、惹かれ合う仲になった。

エイップスルタンに船が着くと料理人メメッドは一行を船から下ろした。若い理髪師メメッドは、一行の荷物が船に残っているのを見て、一行はまた船に戻ってくるに違いないと考えた。

さて、一行は船から下り、若妻とその母親が並

41 原文には、料理の名前として、zeytinyağı dolma(ゼイティンヤール・ドルマ：ブドウの葉で米や松の実、カラントなどを巻いたものをオリーブオイルを入れて炊いたもの)、irmik helvası(イルミック・ヘルヴァス：セモリナ粉をバターと砂糖で炒めたお菓子)、kuzu kızartması(クズ・クザルトマス：子羊の肉を焼いたもの)、salata(サラタ：サラダ)などが記されている。

42 原文は、Mehmed(メメッド)。このメメッドという名前は、きわめてありふれた名前で、この話では、料理人の名前であると同時に、若い理髪師の名前でもある。

43 原語は、İrmik helvası(イルミック・ヘルヴァス)。イルミックと呼ばれるセモリナ粉をバターと砂糖で炒めて作った甘いお菓子。

44 原語は、Eyüp Sultan(エイップスルタン)。イスタンブール市内の金角湾内に面する町。

45 原語は、Beyoğlu(ベイオール)。イスタンブール新市街にある地区

46 原語は、tulumbacıları(トゥルンバジラール)。揚げ菓子屋を意味する。

47 原語は、Balıkpazarı(バルックバザール)。普通名詞では「魚市場」の意味であるが、原文では固有名詞として表記されている。イスタンブール新市街にある地区だと推定される。

48 原語は、Kayserili(カイセリ)。現在のトルコ共和国の中央部にあるカイセリ県付近。

49 現在のアルバニアは、バルカン半島南西部に位置する共和制国家。

50 原語は、複数形でLazlar(ラズラール)。トルコ共和国の黒海東部から、グルジアとの国境近くに住むラズ語を話す少数民族。

んで歩き、その後に料理人メメッドが従った。少し行くと、チーズ入りピデ⁵¹を売る店が客の呼び込みをしていた。料理人メメッドは、見るものすべてを試したくてたまらず、さっそくチーズ入りピデを買い、ほおばりながら二人の後を歩いた。若妻の母親はそれを見て「メメッド、歩きながらピデを食べる人がいますか。何と行儀の悪いこと」と叱った。メメッドは「そうではありません。空腹を癒しているだけでございます。きちんと奥様方に付き従っております」と言い訳するのだった。

アイスクリーム⁵²屋は「桜桃味、ヴァニラ味、杏味…」と声を掛けた。メメッドはアイスクリームというものを食べたことがなかったので、アイスクリームをかうと一気に全部を口に入れ「舌も歯も凍ってしまう」とその冷たさに驚いた。怒ったメメッドがアイスクリーム屋に「口が凍るとなぜ言わないのか」と文句をいうと、アイスクリーム屋は、アイスクリームはスプーンで少しずつ掬って食べるものだと言明するのだった。このやり取りを聞いていた若妻の母親は、料理人メメッドに、「一緒に歩いている時は、後生だから何も買って食べないでくれ」と頼むのだった。

ほかにも、ケバブ屋、ピデ屋、カイマック⁵³屋などがそれぞれ独特の掛け声で呼び込みをしていた。通りには花屋も店を開いていた。ヒヤシンス、ナデシコ、スマイレなど色とりどりの花が並んでいた。寺院⁵⁴の門前には物乞いがおり、その物乞いが若妻に何となく声を掛けた。すると、若妻はその物乞いに金を与えた。それを見た料理人メメッドは、物乞いの握った掌をこじ開け、金を取り戻そうとしたが、若妻はそれを制し「物乞いは

私のために、アッラーの思召しで好きな人に巡り合えますようにと祈ってくれた」と言った。これに対し、メメッドは「奥様はそうおっしゃいますが、私がいくら奥様のために祈っても、私には何もくありません」と不満を返すのだった。

一行は、ふたたび船を出してキャートハネで下船し、昼食を摂るに良さそうな木陰を見つけると敷物を広げた。一行の後を船で付けてきた理髪師メメッドも、それをみて近くの樹下に腰を下ろした。料理人メメッドは、用意してきた料理をすべて広げて温め始めた。またコーヒーも準備した。料理人メメッドは、ハサン氏の屋敷にきて以来、行楽に出るのは初めてだったので嬉しくてたまらなかった。

キャートハネでは、たくさんの人々があちこちに陣取り、それぞれサズ⁵⁵を弾き、歌を歌って楽しんでいた。ジプシーの女たちがそれらの集まりを順に巡り、踊りを披露した。料理人メメッドは、作りかけのコーヒーのことを忘れ、その女たちに目が釘付けになっていた。

料理人メメッドが我を忘れている間、若妻は、手に持つ日傘を目前で下げかつ上げて、近くに座っている若い理髪師のメメッドに挨拶を送った。理髪師メメッドもそれに応え、被っているトルコ帽を下げかつ上げた。これが男女の無言の挨拶だった。男女の間には、言葉を使わない会話の方法があった。女がハンカチで顔を扇ぎ、それに応えて男が上着の前裾を開け閉め閉めする仕草をすると、それは恋慕の情を通じ合わせたしるしだった。また、女が着物の裾を閉じる仕草をし、それに男が上着の前裾を閉じる仕草で返すと、寝室を共にすることを意味した。また、着物の右側

51 原語は、pide(ピデ)。トルコ風のピザ。イタリア語の「ピザ」は、このトルコ語の「ピデ」が変化したものとトルコでは信じられている。

52 原語は、dondurma(ドンドゥルマ)。トルコ風のアイスクリームで、卵を入れず、ウルシ科に属するサクズという木の樹液を増粘剤として使うため、強い粘りがある。

53 原語は、kaymak(カイマック)。しばらくたての牛乳をあたためると、凝固した乳脂が表面に浮き上がってくるので、それを分離したクリーム状の食品。

54 原語は、cami(ジャーミイ)。イスラム教の寺院、いわゆるモスクのこと。

55 原語は、saz(サズ)。琵琶に似たトルコの伝統的な弦楽器。

を手で払う仕草をみせると自分の右側に、左側を払うと左側に、恋しい人に来てほしいと知らせるしるしだった。

若妻は、水を飲む口実で水飲み場に寄り、そこで待っていた若い理髪師メメッドに好ましく思っているとそっと伝えた。若い理髪師も若妻に恋していると返した。その返事を聞いたとたん、若妻は足元のくぼみに躓いたふりをしてわざと転んだ。それを見て、若い理髪師のメメッドは若妻の細い肩を抱き上げ、大丈夫かと尋ねた。若妻は、足首を挫いたふりをして若者の肩によりかかりながら、ゆっくりと母親のもとに戻った。若妻を抱きかかえる若者を見た料理人メメッドは、血相を変えて二人のもとに駆けよった。若妻の母親は、娘の怪我に気づかなかった料理人メメッドを責め、他方、娘を助けた若者に感謝の言葉を伝えた。

さて、若妻を座らせると若い理髪師のメメッドは泣き始めた。若妻の母親がなぜ泣くのかと尋ねると、若い理髪師は貴方の言葉に涙が出たのだと答えた。自分の言葉のどこに涙が出たのかと母親がさらに尋ねると、若い理髪師のメメッドは「貴方の親御様にアラーのご加護がありますように」という感謝の言葉で、5年前に亡くなった母親を思い出したと答え、また若妻の母親がその亡母に似ていると言って手の甲に敬意の接吻をした。

それを聞いて若妻の母親はもらい泣きし、若妻もつられて涙を流した。それを見ていた料理人メメッドも、大声で泣きはじめた。若妻の母親が、なぜお前まで泣くのかと尋ねると、料理人メメッドは、自分の役目は二人に従ってお供をすることなので、二人が泣いているのに自分が泣かないわけにはいかないと答えた。

若い理髪師のメメッドは、若妻の母親に、自分は理髪師だから外科の素養もある⁵⁶ので若妻の足

を手当したいと申し出た。若妻もますます足が痛いと訴えた。もちろん、これは若妻と理髪師メメッドが近づくために仕組んだ芝居だった。

若い理髪師のメメッドが若妻の足に手当を施し、まだ痛むかと聞くと、若妻はたいそう楽になったと礼を言った。若い理髪師のメメッドがその場をたち去る素振りをする、今度は、母親がこの理髪師は自分の息子のようにと言って引き止めた。これを見ていた料理人のメメッドが「あの若者が息子なら、私は？」としつこくきくので、母親が「娘の叔父」と答えてやると、料理人はふたたび喜んで料理を出した。若妻の母親は若い理髪師のメメッドを食事に誘うと、理髪師は、最初、固辞する素振りをみせたが、最後には一行に加わり食事を始めた。

食事がはじまってすぐ、料理人のメメッドは理髪師の若者が若妻に色目を使っているのをみて、この理髪師を追いはらうよう若妻の母親に訴えた。母親は「そんなことを言うものではない。あの若者は自分の息子も同然なのだ」と答えた。すると、料理人メメッドが真顔で「この男もお産みになったのですか」と聞き返したので、若妻の母親はただ呆れるばかりだった。料理人メメッドは、食事中、ずっと若い二人に目をひからせた。

食事が終わると、料理人メメッドは皿を洗うため水を汲みにいき、若妻の母親も水を飲みにその場を離れたので、若妻と理髪師は二人切りになった。若い理髪師のメメッドは、この隙に若妻に一つの計略を授けた。

その計略というのは、まず屋敷に戻った次の夜、若妻が仮病を使って腹痛を訴え、スルタンアフメットに「つづら⁵⁷持ちの産婆」という高名な産婆がいるので、その産婆を必ず呼んでほしいと懇願する。そして、その産婆のつづらに理髪師メメッドが隠れ、まんまと若妻の部屋に忍び込むと

56 当時、理髪師は抜歯や怪我の手当など外科的な施術も行った。

57 原文では、sandık(サンドウツク)。日本語で、つづら、木箱、長持などに相当する収納具。

いうものだった。

さて、料理人メメッドと若妻の母親が戻ると、若い理髪師のメメッドは、何事もなかったように丁寧に挨拶をして一行と別れた。

一旦休話⁵⁸

日も暮れたので、一行はまた船に乗り屋敷に戻った。

さて、若い理髪師のメメッドに話は移る。この若者は、スルタンアフメットの旧ザプティエ通りタヴックハーネ横町に、年の頃50歳くらいの母親と暮らしていた。この母親の生業は産婆であった。

若い理髪師のメメッドは家に戻ると、母親にキャートハネで起こったこと、そして好きになった若妻と計略をたてたことについて話した。話を聞いた母親は、どうやって重たい息子をつづらに隠し、屋敷まで運べるのかと切り返した。息子は、心配せずともよいと繰り返したが、母親は怖くてたまらなかった。すると、息子は泣きながら、もし運んでくれなかったら、恋わずらいで肺病⁵⁹になってしまうと脅した。母親は、結局、しぶしぶ息子をつづらに隠して運ぶことに同意した。

さて、ハサン氏の屋敷に話は移る。

キャートハネから戻った次の夜、申し合わせ通り若妻は仮病を使い、泣きながらお腹が痛いと訴えた。夫のハサン氏が狼狽していると、若妻の母親が入ってきて妊娠しているのではないかと聞いた。それを聞いたハサン氏は、すぐに産婆を呼びに行くよう命じた。

若妻の母親は、旧知のファトマという産婆を呼ぼうとしたが、若妻は、小さい時、その産婆にひどい扱いを受けたから嫌だと拒んだ。母親は、次にハジェールという産婆を呼ぼうとしたが、若妻は、また理由をつけて、その産婆も嫌だと拒ん

だ。困った母親は、誰だったらいいのかと娘に尋ねた。

すると、若妻はすかさず、スルタンアフメットに「つづら持ちの産婆」と呼ばれるたいそう有名な産婆がいるので、その産婆を呼んでほしいと頼んだ。母親が、その産婆はどこに住んでいるのかときくと、若妻は、すらすらと住所を暗唱して答えた。

夫のハサン氏は大声で下女を呼び、料理人メメッドを起こして、一緒にその産婆を連れてくるように言い渡した。料理人メメッドは寝込みを起こされたので、不機嫌にこんな時間に産婆は来ないと言いつ返したが、結局下女に同行するはめになった。

さて、産婆の家を見つけた二人は扉を叩いた。顔を出した産婆に、二人は主人の妻が産気づいたので呼びに来たと答えた。産婆は、話は分かったが、しかし、このつづらも一緒に運んでもらいたいと言った。料理人メメッドは、必要な物はすべて運ぶので心配するなと答えた。

そのやりとりを聞いていた若い理髪師のメメッドは、すばやくつづらの中に身を隠し、外が見えるように小さな覗き穴をつづらに開けた。母親の産婆は、息子が隠れているつづらを指して、中には壊れ物が入っているので注意して運ぶようにと言った。

下女が行き先を提灯で照らし、その後に料理人メメッドが重いつづらを担いで続き、その後を産婆が追いかけて、夜道を急いだ。3人がハサン氏の屋敷に着くと、今来るかと産婆を待ちわびていたハサン氏が急いで扉を開けた。重いつづらを担いで疲れはてた料理人メメッドは、もう少しでつづらを落としかけ、つづらの中の理髪師メメッドは冷や汗をかいた。

そうこうしている間に、つづらと産婆は無事に

58 語り手(メッター)は「ここで一旦休憩し、続きはタバコを一服し、コーヒーを飲んでから」と述べ、語りを休止する。そして、演台を降りて、タバコとコーヒーを飲み、聴衆から席料を集めた後、また台に上がり、話の続きを始めた。

59 原文はverem(ヴェレム)で、「結核」と記されている。

若妻の部屋に通された。産婆はすぐに自分以外の者はすべて部屋から出て行くようにと厳命した。ハサン氏は、若妻の部屋の真下にある料理人メメッドの部屋に急いで入った。

若妻の部屋では、つづらから飛び出てきた若い理髪師のメメッドが、若妻と抱き合いもつれ合った。木の床はミシミシと音をたて、それが真下にある料理人の部屋にも響きわたった。それを聞いた料理人メメッドは、天井がミシミシ鳴っていると言った。ハサン氏はネズミだろうと答えたが、料理人メメッドは、ネズミではなく、つづらが重すぎて床が抜けるのではないかと怖がった。ハサン氏は、かつてその部屋に4、50人も客を呼び、ヘルヴァ・ソフベティ⁶⁰を催したこともあるので、つづら程度ではびくともしないと言い返した。

若妻と抱き合った後、若い理髪師のメメッドは、つづらの中にまた隠れた。母親の産婆は家人を呼び、若妻の腹痛は治ったので今夜はこれで帰ると言ったが、ハサン氏は心配だからと産婆に泊まるように求めた。しかし、産婆は、別の妊婦が待っているののでどうしても帰らなければならないとハサン氏の申し出を断った。ハサン氏は仕方なく産婆に謝礼を渡し、料理人メメッドにもう一度つづら担いで産婆を家まで送るように言い渡した。

ところで、料理人メメッドは間抜けではなかった。キャートハネで二人の様子を目聡く見定め、自分が背負っているつづらの中に若い理髪師が隠れていることを見抜いていた。しかし、そのことを口に出さず、産婆に、腰が痛いのでつづらを放り出したいと言った。産婆が、壊れ物が入っているから駄目だと返すと、料理人のメメッドは、壊れ物など入っているわけではないから地面に放り投げて大丈夫だろうと産婆に迫った。つづらの中

の若い理髪師のメメッドは、それを聞いてまた冷や汗をかいた。

さて、その夜、憲兵⁶¹隊長の家では、息子の活礼式の祝宴が催されようとしていた。隊長は祝宴の余興に影絵芝居⁶²をみせようと、朝から影絵師を探していたが、運悪く見つからなかった。

その夜、憲兵隊員の一人が街を見まわっていると、背中につづらを担いだ料理人メメッドが向こうからやってきた。憲兵はメメッドに止まるように命じ、こんな夜中に、大きなつづらを担いでどこへいくのかと質問した。メメッドが妊婦を往診した産婆を送っていくのだと答えると、憲兵はつづらの中身は何かと尋ねた。くどくどと尋問を続ける憲兵に、料理人メメッドはからかい気分で「影絵芝居の道具なんか入っていませんよ。もちろん産婆の道具です」と答えた。すると、憲兵は最初の言葉だけを聞いて、「これはよいところで出会った。一緒に来い。隊長の家で活礼式の宴会があるから影絵芝居を披露しろ」と、有無をいわず料理人メメッドを隊長の家へと引っ立てた。料理人メメッドは仕方なく憲兵の後に従ったが、産婆はそっと逃げ出した。

隊長の家に着くと憲兵は隊長に影絵師を連れてきたと報告した。隊長は、つづらの中は何かと聞き、憲兵が影絵芝居の人形だと答えると、つづらを降ろすように命じた。

隊長は、連れて来られた料理人メメッドに、カーテンを吊って影絵芝居の準備をするよう命じた。料理人メメッドがカーテンなどないと答えると、隊長は、家人にカーテンを持ってこさせ、影絵芝居をはじめよう命じた。

料理人メメッドは、自分は影絵師などではなく、つづらを運んでいるだけで、つづらの中身は知らないと答えた。隊長が、ならばつづらを開け

60 原語は、helva sohbeti(ヘルヴァ・ソフベティ)。お菓子を食べながら、詩を作ったり、おしゃべりしたりする知識人の男性の集まりのこと。

61 原文では、Kollukçu başı(コルルクチュバシ)。治安を担当する役人のリーダー。Kollukçuは、公安官、治安警察官、憲兵などを意味する。

62 原文は、Karagöz(カラギョズ)。トルコの伝統的な人形を使った影絵芝居。

るようにと命じると、料理人メメッドは鍵がないと答えた。埒もないと隊長が力任せにつづらを開けたところ、中から若い理髪師のメメッドが飛び出してきた。

驚いた隊長が「お前が影絵芝居をするのか？」と尋ねると、窮地に陥った若い理髪師メメッドは「隊長殿がご存知の影絵芝居ではありません。特別な影絵芝居なのです」と言いつくろった。しかし、隊長がつづらの中になぜ入っていたのかと厳しく尋ねると、理髪師のメメッドは観念して隊長にすべてを打ち明けた。

それを聞いた隊長はハサン氏とその若妻を呼び出し、二人を離婚させた。つぎにその場で若い理髪師のメメッドとその元妻を結婚させた。さらに、隊長は、今度は理髪師メメッドの母親の産婆を呼び出し、その産婆とハサン氏とを結婚させた。かくして二組の夫婦がめでたく誕生した。

この話から分かるように、誰もが自分の年と釣り合った同じ年頃の伴侶を見つけるべきなのだ。年老いた男が、かくのごとき若い娘と結婚するから、こういう騒動が起きるのである。

D. 考察～メッダー嘶に表現された都市イスタンブルのイメージとその文化的多様性～

1. 近世イスタンブルの都市イメージ ～繁栄と栄華～

近世イスタンブルは、メッダー嘶の中で、どのような都市としてイメージされているのだろうか。本論文で紹介した『見たか？このブチュックを』の中で、イスタンブルは次のような諺として語られている。「イスタンブルは、石も土も金でできている。」イスタンブルは、経済的發展と富の

集積を誇るオスマン帝国の中心都市として揺るぎないイメージを保持していたことが、この諺にも示されている。

この繁栄を目指して、周辺地域から多く人々がイスタンブルに移住したのであるが、この嘶の主人公であるブチュックもそのような地方出身者の一人だということになる。そして、このブチュックが、奉公先の主人の計らいで妻をめとり、主人の右腕として重用されたと嘶は続くのである。このことは、とりもなおさず、職を求めてイスタンブルに流入した地方出身者が家庭をもつことができ、それなりに成功を遂げることができたことを示していよう。だから、この嘶は、そのような地方出身者の成功物語として理解することも可能である。

ただ、この田舎からでてきたばかりのブチュックは、ガラダ橋が金で出来ていると誤解し、橋をツルハシで削ろうとするのだが、このガラダ橋が建設され19世紀中頃(1846年)のオスマン帝国は、すでにかつての繁栄と栄華を謳歌した時代は過ぎ、台頭するヨーロッパ産業国家による圧迫を受け始めていた⁶³。1853年にロシアとの間で戦われたクリミア戦争では、英仏の加担によって完敗は免れたものの、帝国の国力の衰退ははっきりと伺えるものとなった。しかし、そのような19世紀半ばの国際状況は、メッダー嘶にはまだ反映されない。イスタンブルで暮らす一般庶民の生活意識において、イスタンブルはまだ往年のきらびやかな栄華の中にあったといえることができるだろう。

そして、このイスタンブルを包み込む繁栄と栄華の都市イメージは、台頭するヨーロッパ世界にも、エキゾティシズムという潤色と侮蔑が交差したアンビバレントなまなざし⁶⁴を加えられながら

63 新井政美『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社、2009年、p.75では、国内の産業化をめざした改革が行われたものの、ヨーロッパ列強による圧力を受け「オスマン人の作った官営、民営いずれの工場も、外国製品に対抗しながらオスマンの産業を発展させてゆくだけの十分な推進力にはなりえなかった」と指摘されている。

64 E.W.サイードは『オリエンタリズム』(下巻)板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー 1553、pp.413-424で、19世紀のオリエンタリズムを考察する上でもっとも適したテキストとして、オスマン帝国世界を旅行し、紀行を著したネルヴァルとフローベールを挙げ、さらにp.422で、とりわけフローベールのオリエンタ観の中に「アンビヴァレンス」の要素を確認している。

伝播し、その帝国主義的野心に深く潜在的な動機づけを与えるものとなったといえるかもしれない。

2. 宗教／エスニック文化の多様性～流入する地方出身者や異教徒たち～

メッダー嘶に登場し、聞き手を笑いに誘う地方出身者の方言の種類の多さは、そのままオスマン帝国の中心都市としてのイスタンブルが飲み込んできた宗教／エスニック文化の多様性を反映するものであるといえるだろう。また、嘶の中に登場する宗教／エスニック集団出身者の多さと多様性も同様である。

たとえば、『理髪師メメッドの話』に登場する若妻を娶った初老のハサン氏は、インド、バロチスタン、ダゲスタン、ギリシャなど広大な地域を股にかける商人として描かれている。バロチスタンは今日パキスタンの一部であり、ダゲスタンはロシア連邦に含まれる共和国であるから、そのハサン氏の商圏の広さは、近世トルコの経済圏の広さをそのまま物語るものといえよう。また、地方出身者も多い。たとえば、『見たか？このブチュックを』の主人公ブチュックは、黒海沿岸地方のダダイ出身として描かれているし、『理髪師メメッドの話』の舟遊びの場面には、中部アナトリア地方のカイセリなどの地方出身者が登場する。さらに加えて、この嘶には、オスマン帝国の支配をうける異民族としてアルバニア人や少数民族のラズ人なども登場する。また、『美男の布屋』の海岸での競りの場面では、ユダヤ人古物商やアルメニア人の漁師など、前者はユダヤ教徒、後者はキリスト教徒というイスラム教とは異なる宗教集団に属する人々も登場してくる。

これらの多様な宗教／エスニック文化に属する

人々の特徴や性格が適度にデフォルメされ、また、それぞれの方言や独特の言葉遣いがメッダーによって巧みに模倣されることは、メッダー嘶が話芸として大衆に受容される上で、きわめて重要な要素となっていたといえるだろう。

このように、オスマン帝国にかぎらず近世のムスリム社会が、キリスト教徒やユダヤ教徒など多様な宗教集団を巧みに包含してきた、柔軟性と寛容性をもつ社会であったという歴史はたしかに実在した。それは、このメッダー嘶をとおしても伺いいうところである。

しかし、他方、そのような歴史への言及が、イスラームの柔軟性や寛容性を強調するひとつのディスクールとして機能していることも、また指摘できるかもしれない。⁶⁵ 実際、近世オスマン帝国時代の社会は、けっしてそのような宗教的寛容性や柔軟性だけが支配的であったわけではない。宗教間には、不文律の社会的境界や越えることのできない制度的障壁が厳然と存在していた。そのことは、たとえば、『美男の布屋』のスレイマンとエレニのように、前者がムスリム、後者がクリスチャン(ギリシャ正教)であるために結婚することができない運命を背負った存在であったことでも分かる。

しかし、その反面として、そのような不可避の運命があればこそ、それをめぐる登場人物同士の摩擦や葛藤が物語を回転させる重要なモーメントとなり得たのである。メッダーたちは、そのような前提を受け入れて、先述したような嘶の戦略と技法を巧みに動員することで聴衆を笑いに誘うのだが、それを逆方向からみれば、現実の社会において、これらの宗教／エスニック文化の異質性をもたらし諸々の摩擦や葛藤を巧みに笑い中に昇華させ、人々にカタルシスをもたらしことで、それ

65 今日の思想的に不寛容性を強めるムスリム運動に対する非ムスリム世界からの懐疑的なまなざしに対して、対抗的に発せられる言説などに典型的に認められる。たとえば、白杵陽「イスラム教は寛容な宗教」『産経新聞』産経新聞社朝刊国際版、9月18日付で、白杵は、「イスラム統治下のキリスト教徒やユダヤ教徒などは『啓典の民』として税金を払えば(むろん重税の場合もあるが)生命の安全と宗教的自治が保障されたからであった。宗教が生活のすべてを律していた当時の基準からいえば、異端審問で処刑まで行なった中世カトリックよりもイスラムはずっと寛容な宗教だったというのが研究者の共通の認識であるといえる」とその寛容性を強調している。

らの摩擦や葛藤を回避させることに成功したのだといえよう。

いずれにせよ、メッダー嘶の中に登場する宗教／エスニック文化の多様性は、近世トルコ社会、とりわけイスタンブルを生きた市井の街人たちの文化的多様性をきわめて忠実に反映するものだったといえるだろう。ただ、その後、近代に入って、オスマン帝国の崩壊とトルコ共和国の建国以降、トルコ民族主義の拡大によって、このような民族的多元主義と多様性に対する寛容さは、イスタンブルにおいても、徐々に失われていったと言わねばならない⁶⁶。しかし、すくなくとも、メッダー嘶の中に封じ込められたこのような宗教／エスニック文化の多様性が、今日もなお、イスタンブルの都市文化の基底に流れる一つの歴史的経験となっていると考えることは難しいことではないだろう。

参考文献

- Altunel, İbrahim: 'Kıssahan', *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, Ankara, c.25, p.502.
- And, Metin: *Geleneksel Türk Tiyatrosu*, İnkılap Kitabevi, İstanbul, 1985.
- 新井政美『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社、2009年
- Güngör, Şeyma: *İstanbul Meddah Hikayeleri I*, Tufli Hikayesi, Çantay Yayınevi, İstanbul, 2006.
- İto, Kiyoko: *Türk Meddah Hikayeleri ile Japon Rakugo(Nükteli Hikaye)ların Mukayesesi*, 博士論文提出: イスタンブル大学、2012年)
- 井藤聖子、山中速人「イスタンブル・ファーティー地区(トルコ)の街頭景観における宗教的表象とその多義的解釈～景観映像に対する読み取りインタビュー調査報告」『総合政策研究』no.45, 2013年11月, pp.39-83.
- Nutku, Özdemir: *Meddahlık ve Meddah Hikayeleri*, Ankara Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurum Atatürk Kültür Merkezi Yayını, 1997.
- バムク, オルハン(和久井路子訳)『イスタンブル～思い出とこの町』藤原出版、2007年
- サイード, W.エドワード(板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳)『オリエンタリズム』(下巻)、平凡社ライブラリー 1553
- 白杵陽「イスラム教は寛容な宗教」『産経新聞』産経新聞社朝刊国際面、9月18日付
- 山中速人、井藤聖子「都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ～イスタンブル(トルコ)における街頭映像の記録と分析」『総合政策研究』no.43, 2013年3月, pp.83-105.

66 ノーベル文学賞を受賞したオルハン・バムクは、その自伝的エッセーである『イスタンブル～思い出とこの町』和久井路子訳、藤原出版、2007年、p.304で、「わたしの子どもの頃や青年時代のイスタンブルは、コスモポリタンの町という性格が急速に失われた場所であった」と回想し、「トルコ共和国が建設された後は、征服の継続、イスタンブルのトルコ化の激しさ、町で国家の行なった一種の民族的要素の粛清が、全ての言語をなくした」と書いている。